

## 第3回 滋賀県社会教育委員会議 概要

〔日 時〕 令和3年7月26日(月)

14:00~16:30

〔会 場〕 県庁本館4-A

(オンライン会議)

### 【出席委員(五十音順)】

板倉 正直委員	加藤 芳顕委員	金井 文宏委員	高野真知子委員
田口真太郎委員	橘 円 委員	富永美砂穂委員	永井 泉委員
平尾 香子委員	藤谷 忍委員	宮本 麻里委員	望月 美希委員
吉田 尚子委員	(13名)		

### 1 開 会

○議長挨拶

### 2 議 事

(1) 審議 テーマ「これからの地域を担う人材の育成・確保のための  
社会教育・生涯学習のあり方」

○審議のまとめと提言案について

○提言案にともなう社会教育施策について

○今後の予定について

### 3 その他、諸連絡

### 4 閉 会

○課長挨拶

### 【別紙資料】

資料1：研究調査活動(現地視察)報告

資料2：令和2・3年度滋賀県社会教育委員会議提言(案)

資料3：令和3年度人生100年時代の地域における学びと活躍推進事業

資料4：令和4年度以降の社会教育施策(案)

資料5：今後の予定

## 1 開 会

○議長挨拶

## 2 議 事

### (1) 審議テーマ

「これからの地域を支える人材の育成・確保のための社会教育・生涯学習のあり方について」

#### 【議長】

それでは、議事に入らせていただきます。

報告事項について事務局から御説明をお願いいたします。

#### 【事務局】

○滋賀県社会教育委員研究調査活動(現地視察)報告 (※別添資料1)

- ・ 県立安曇川高等学校の高校魅力化・地域連携・社会教育士等における取組について
- ・ 高島市役所(社会教育課・市民協働課)における教育とまちづくりの連携について

#### 【望月委員】

安曇川高校を訪問しまして、私も昨年度まで安曇川高校と同じ総合学科の高校におりましたので、特徴を生かした大変良い取組がされていると感じました。

レジュメにありますように、総合学科の特徴としまして、「産業社会と人間」という科目が原則必修であるということがあり、キャリア教育を丁寧に行うということが出来ます。簡単に言いますと「自分探し」ですとか、「自分って何だろう。」「自分にむいているものは何だろう。」など社会に出たときに、どういった方向に進むべきかということ、かなり時間をかけて学習していく科目になっています。

そういった中で様々な活動をなされていました。学校の悩みとして、情報提供していてもメディアになかなか取り上げてもらえないとおっしゃっていたのですが、ちょうどこの訪問の後に NHK で安曇川高校の生徒がアドベリーの収穫をしているというニュースが放映されているのを見てよかったなと思いました。

次に高島市役所の方では、コーディネート人材のような間をつなぐ方がいらっしゃって、高校と地域をうまくつなげる仕組みが体制としてできており、やはり人が替わってしまうと状況が変わるということはあるけれども、単発に終わらず継続して取り組んでいるのは、そういったコーディネートできる人材や窓口があって仕事をしてくださっている人がおられることがあるからだと改めて思いました。

#### 【吉田委員】

安曇川高校で御説明いただいたときに、校長先生とか中心に関わっておられる先生以外に、全体の先生方の変容はどうかと質問をされたときに、「自分たちがどんな学校にしたいのかということを通じて、特に若い先生方が自分事にしていかれた。」というお答えがとても印象的に残りました。

学校が次を見据えてある方向に舵をとったときに、ワクワクされる先生方と、しんどいと思われる先生もおられると思います。しかし、そこで「語ること」が一つの重要なキーワードになると思いました。

それと同じように先生方にも求められることは、子どもたちとも対話しながら引き出していくことだと、このときの御説明の中で、すごく感じました。

また、何か言語化してまとめていく力、これはコーディネーター人材にも必要な力ですが、あえてそういうことを学ぶ機会ってというのが、これからは必要になってくるということも感じさせていただきました。

それともう1つ、高島市との関わりで感じたことは、外部の先生がすばらしいエキスパートで力を持っておられることもあるのですが、その方と市職員が人としてつながっておられたことが、すごく印象的でした。やはりチームになるというか、学校とか所属というものを越えたところで連携がとれることってというのが、すばらしい実例というものを作っていくのだなと強く感じました。

異なる背景の人たちがどうやったらつながれるかとか、どうやったら学びをきっかけに連携がとれるかってというのが、これからの教育を支えるものになるということを示している事例だと思いました。

#### 【議長】

ありがとうございました。

6月にたくさんの委員の皆さんが視察に行っていたいただいて、学校の先生や役場職員さんと語り合っていたことが、大変収穫が多かったというふうに思っています。

今ほど出ましたことにつきましては、この後の提言であるとか、今後の方策についてでも、非常に関係深いかなと思っておりますので、あわせてよろしく願いいたします。

一つ目の報告については以上です。

それでは次の議事のほうに移りたいと思います。事務局より提言書案について説明をお願いします。

#### 【事務局】

○提言書（案）の説明（※別添資料2）

##### 1. 審議の背景

###### （1）滋賀県の社会教育・生涯学習を取り巻く状況

① 人口減少・超高齢化時代の社会教育・生涯学習の様子から

② 県内の社会教育施設、社会教育関係職員の様子から

###### （2）第3期滋賀県教育振興基本計画および滋賀県基本構想の実現

##### 2. 審議テーマ

##### 3. 審議日程

##### 4. 論点整理

#### 【議長】

ありがとうございました。

それでは説明していただいた提言書の1番から4番について御意見等をお伺いしたいと思います。

先ほど申し上げましたようにせっかくの機会ですので、それぞれの立場から御出席いただいておりますので、短めに発言していただいてたくさんの御意見を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。もし出ない場合は、御指名させていただきますのでよろしくお願いいたします。オンラインの方はオ

ーバーアクションで挙手をお願いします。まずオンラインの方から、どうですか。

【永井委員】

この4番の論点整理の中で、(2)番についてですが、私は中学校に勤めていますので、学校と地域での人材育成という部分でお話します。目の前にある地域課題について、自らの問題としてとらえ学習です。この辺りが中学生にとっては大事なところかなと思います。

地域とつながっていく中で、そういう学習を進めたいと思っています。先ほどの安曇川高校の総合学科の中でなら、そういう取組ができますが、現状として中学校の場合は、総合的な学習の時間というのが週2時間しかございません。その中で、人権学習であったり、キャリア学習であったり、いろんな学習をしなければならないので、本校の場合は、地域について学ぼうというのは、1年生の1学期にあるだけです。

以前ですと、地域の課題を調べて、例えば市役所の方に来てもらって、行政の課題などのお話を聞いてその中から課題を見る学習も結構行われていたのですが、現在は、十分な時間取れないのが課題だと思っています。その中でも、体験活動を大事にしながら、地域とのかかわり、地域に愛着を持つ子どもを育てていく必要があると思っています。

もう一つは2年生で職場体験に出かけます。滋賀県は、各中学校が比較的熱心にやられていまして、コロナ禍で去年は全部中止になりましたけど、今年は3日間、何とか地域にお願いして地元で職場体験を10月に実施できることになりました。子どもたちが地域に出かけて、地域の人と、本来はキャリア教育ということで働くことを学びます。そのときの1つのポイントとしてはやっぱりその地域を知ること、すごく大事な機会であると思って、今年は実施できることを楽しみにしております。

【金井委員】

高校の状況がある程度わかっているので、そこに書いてある「社会に開かれた教育課程」というの、今回の中教審で特に高校改革が目玉になっています。総合的な探究学習が「探究」という言葉が入り、なるべく現場に出ていこうということで、先程の高校魅力化プロジェクトみたいなことを、特に今、島根県は全公立高校を挙げて行っています。

モデル事業では地域コーディネーターという自治体から給料もらっている方が各高校に常駐して、いろんな高校に直接関わりながら学校を社会に開いていくために、地域の方が学校に来る、学校から地域に出ていくってということが取り組まれています。

隠岐島前高校では、観光ということで民宿をされている方が多くおられ、現場に行ってもどんな課題があるか、自分たちができることを見つけ、例えば外国人が民宿のお風呂の使い方がわからないという問題について、高校の英語の授業を活かして、日本のお風呂の使い方を英語で書いて、民宿の方に配るというような本当に直接役に立つようなことをされています。

力を入れているところは、地域コーディネーターという方が今回の高島の安曇川高校みたいにいると結構なことができるのですが、全国ほとんどの公立高校にはいないのが現状です。そうすると、公立高校の先生方は黒船が来たという。これまではどっちかという教科のことを一方的に教えていたのが、地域の課題を見つけると言われても、なかなか難しいのです。

しかも高校の地理探究となれば、地域でいろんな防災の地学的な知識もいるので、地図を見てどこにハザードマップの危ないところあるのかみたいなことを具体的にやると書いてあるんですね。

私はもともと現代社会の教員として、これは公共というふうに変わりまして、公共で地域の福祉にどう  
いう課題があるのか、そういうことを教員はこれまでしてきたことがないので、みんな黒船だと言っ  
ていました。

けれど今、教育委員会の研修の地域探求分野には多くの先生が来られます。高校は、来年から新しい指  
導要領に入るので、どのように地域との関係を作って、地域でどう探求しながら地域課題が解決できる  
ような人材を育てていくかが、まさに高校では課題になっている感じです。

農業高校とかは、結構やってきたので、職業科は逆に待ちに待ってたような感じです。あと国公立大学も  
地域連携ということが言われているので、結構熱心に地域に関わっていこうとされています。入試改革  
があって、ペーパーテストでなくても地域課題に取り組んだということが、自分で書いて面接で言えれ  
ば、国公立大学の3割程度は、ペーパーテストなしで通るようになります。ですから地域探求や地域課題  
について取り組み、力をつければ地元の国公立に行ける。滋賀県立大学とか滋賀大学に行けるというこ  
とも、おそらく現場では対応していかなければならない感じになっていると思います。

#### 【高野委員】

先ほどのお話とちょっと関連するかと思うのですが、私は中学校に勤めていますが、地域学校協  
働活動ということで、地域と協働して、何かをしようということを一生涯やってきました。みんなの声  
を聞いてつながって、地域の中でいろいろ活動していくと、子どもたちの総合的な学力がつく。それはす  
ごく魅力的なことであるし、子どもが生きていく中で大事な学力で力だというふうに思っています。地  
域学校協働活動を地域とともにある学校ということで互いに開き合いながら一緒にいろんなこと出来た  
らいいなというふうに思っています。

今、課題になっているのは、やはりコーディネーターといいますか、先日も違う会議でそれを話してい  
たのですが、地域にはたくさんの人材がおられるのはわかっているのですが、学校が一對  
一でお願いしているのが現状で、コーディネーターという立場の方が、なかなか見つけれないし、つく  
ることが出来ないというような悩みがあります。

それぞれ地域の方々やったださっているのですが、それを束ねていただく方というか、よりつなが  
っていけるような動きをして下さるような方がいてくださるといいなということを強く思っています。

先ほど視察報告の中に、コーディネーターを派遣している会社があるという話があって、そういう会社  
があるということは、やはりコーディネーターというのがすごく大事だという証であり、職業も成り立  
っていくというものなんだということを思いました。

#### 【議長】

ありがとうございました。はい。現場の悩みもお出しいただきました。

続いていかがですか。はい。お願いします。

#### 【富永委員】

私は地域コーディネーターをしているのですが、今まで、子供たちが地域の課題を見つけて、それに取り  
組むことは良いことだと思っていたのですが、最近では、社会に開かれた学校ということに少し逆行  
するかもしれませんが、地域の課題ではなくて、まず自分の学校の課題を見つけることが大切ではない

かと思っています。

自分たちの学校の中での困りごととか、ここを変えようということをお子孫たちが見つけて変えるようチャレンジしていく、それはまさに自分たちの問題なので、学校全体のことに対してアンテナが立つようになるのではないかなと思っています。

そのうえで、中学校で地域とどのようにつながるかという時には、地域は地域でその課題を解決してる大人の格好いい後ろ姿をお子孫たちにたくさん紹介して、「自分たちの課題を自分たちで越えていく、格好いい大人もいるんだな」とお子孫たちが思えるようなモデルを紹介していくことが、良いのではないかなと思います。

まずはお子孫たちが自分たちの学校を、自分たちで変えていくことにチャレンジして、問題を解決して自信をつけ、そのうえで身近な地域や社会の問題にアンテナを立てるといったことが良いのではないかなと思っています。

#### 【議長】

今、富永さんがおっしゃってくださったことはすごくよくわかります。

私も少し似たことを考えていて、お子孫たちが、この社会に開かれた学校とかっていう、このお題目でもってこの地域につなげられようとしてるんですが、私たちが思い描くような、社会教育とか地域に開かれた教育ってというようなこととは裏腹に、実際地域で活動してらっしゃるいろんな方が、何かこう自分たちの活動にお子孫を組み込んでいくってというようなイメージを抱かれて、お子孫の取り合いみたいなことになって、本来お子孫の教育ってお子孫たちがどう成長していくかっていう、根本のところ意識がいかないまま、お子孫たちを道具にされてしまうような不安みたいなものも、一方で感じています。

その中で、先程の話にあったように、お子孫たちの力をどうつけていくか考えてれば、やはり自分たちの学校の中の、自分たちの自治みたいなもので、小学校でいえば児童会で中学校・高校で言ったら生徒会、そういった組織運営がきちとなされるようなマネジメント、やっぱり先生方としっかり話し合っ力を発揮できるようになって、その上で実際町に出たらこれはどうなるんだ、社会とつながったらどうなるんだっていう、影響力のある社会に自分たちをつなげていくというようなプロセスがやっぱり要るんじゃないかなというふうには感じます。

気になるのは先ほど永井先生が初めに総合的な学習の時間がどんどん少なくなってきた、おそらく、その児童会や生徒会という学校現場の中で、なかなか厳しいものがあるということをお多分おっしゃりたかったんじゃないかなと思うのですが。

その辺り、本当に学校現場の校長の裁量である程度回していかないと、難しいようなところがあると思うのですが、御意見どうですか。

#### 【高野委員】

中学校の生徒会で言いますと、私は、以前よりも主体的な活動がふえていると思います。いや昔はもっと先生の指導によって、生徒会が動いてるとか、委員会が動いてるっていう感じだったんですけども、今、学習指導要領でも主体的な学びということが、強く言われている中で、生徒会も自分たちで考えて、

自分たちでいろいろと仕組んでいこうっていう動きをしていますし、これはうちの学校だけじゃないと思います。

時間的なことも工夫して捻出しながらやってはいるので、生徒会の時間が以前よりも減っているってことはちょっと現場の状況とは、違うのかなあってというような感じを私は受けています。

その中で、地域にも目を向けていこうとか地域でできる活動はないかなというような形で、進めていくような事は考えていこうとなってきました。

#### 【宮本委員】

今、子どもが2人いるんですが、学校のクラスであるような問題を話し合うっていうところが、やっぱり1番最初にあり、その後、町を考える前に、今、本当に小さいですが字会みたいなのがあって、小さな自分の地域のところの何か危ない場所、危険な場所はどこだって話し合ったり、こういうところにこういう人たちが住んでるっていうようなことを、話し合う時間も何回か持つてなっているのは子どもたちの話を聞いていて思っています。

そうやって少しずつ自分の1番身近な地域のことから考えるようになると、廃品回収をどうやってするかっていうのを子どもたち自身が考えて、子どもたち自身が自分で発信する。地域に発信するというのを、最近すごく積極的に学校では取り組んでおられます。そうするとちょっとずつ視野が広がって、もう少し大きい余呉町っていうところの課題について考えられるんじゃないかなと思うので、何か小さなときから少しずつ本当に日常的に段階を踏んで、いろんなことをしていくのが、地元を愛する人材というか、そういうのが多く出来ていくんじゃないかなというように思います。

#### 【田口委員】

昨年の10月に研修会で発表する機会をいただきまして、実はそれをきっかけに、参加されていた方が、自治振興会やコミュニティーセンターみたいなところのいわゆる地域の中で地域コーディネーターとして働いてる方々で、いろんな相談をいただくことができました。

実際にその協議会に何回か行かさせてもらってワークショップとか勉強会もさせてもらっているんですが、いわゆる地区協議会という小学校区にあるコミセンの中で運営されている協議会で、そういうところでは、もう中学生と高校生が全くいない。極端な話、小学校までは、子ども会はあるんですけども、中学校からまちづくりの活動にみんな来なくなってしまう。

そのあとの若い人は、青年団や商工会や30・40代の消防団ぐらいしかなく、人いないからもっと言ってくれみたいな声があつたりで10代になってから20代ぐらいが空白地帯になっています。そこを本当にどうやったら人が来るのかというのを皆さんすごく真剣に悩まれていました。

いろんな地域に入って見えてきたのは、皆さん若い人に期待しているけど、何をお願いしていいか本当にわからない。中学生、高校生に関わってほしいけど何をしてもらえるか、何に関心を持ってもらえるかが、皆さんすごく気になっているので、それぞれで丁寧に地域の事情、学校の事情を聞きながら、マッチングしていくしかないなと思います。これにはすごく時間がかかるといながら、少しずつプログラムを一緒に作っているような活動もさせてもらっています。

今、実際に守山市・長浜市・湖南市・近江八幡市でそういうことをやっているんですけど、やっていく中で、僕自身が今ぶち当たっている課題は、やはり中・高生と一緒に活動するのは少し難しいと正直思っ

ています。

先ほどの資料が非常にわかりやすいのですが、学校教育の中でも小学校、中学校、高校、大学生で全く地域学習、地域に関するニーズが違う。学校・学生側の求めているものとか、関心事もやっぱり違うので、中学生に、地域の求めている提案をしてくださと言われても、やっぱり難しいです。

高校生だと、高校3年生の考えていることと、1年生が見てる課題意識がやっぱり全然違うので、みんな一緒に、同じプログラムでやりましょうと言っても正直難しいですね。

そこでこういうことを、地域側の人はなかなかわからないので、高校生や優秀な大学生はどんどん突破していくんですけど、なかなかそういう人材が現れるとは限らないので、先ほどのまとめのところにもう1回戻りますけど、論点整理の中で、結構コーディネーターに対する期待の比重が大きいなというふうに思いました。僕も講演の中で言っていたので、そうだなと思っているんですけど、コーディネーターについて実はもう少し分解したほうがいいんじゃないかなと感じています。

学校や行政側の社会教育主事さんの担うコーディネーター業務と、地域側や自治会の人たちのコーディネート業務っていうのは全然、役割と性質が違うと思うので、地域のニーズを理解して学校にお願いする立場と学校側で学生のニーズ、学校のニーズを理解して、地域にお願いするところは丁寧なマッチングが必要だなあと思います。

何かそれを地域コーディネーターに全部お願いしますは、すごく危険だなあとというふうにも思うので、それぞれ学校ごと地域ごとに、学校のキーパーソンや地域側のキーパーソンがいらっしやると、すごく前に進むと思います。先日の高島市と安曇川高校がまさにそれだなと思います。

市の職員で、社会教育士さんがいて、学校の中にも社会教育士さんがいて、元々教育委員会にいらっしやった校長先生もいてというすごくいいトライアングルが出来ていて、前に進んでいるというふうに感じていたので、1人が全ては無理なんですけど、みんなで、コーディネーター的な職能を身につけていくといいんじゃないかなと思いつながら聞かせていただきました。

#### 【議長】

ありがとうございます。

はい、どうぞ。

#### 【金井委員】

今の話で言えば学校側と自治体側にちょっとプロフェッショナルなコーディネーターがいて地域側は、そういう方やっぱり難しいと思うんですね。

例えば、富士市立高校という市立学校なんですけど、そこは総合的な探究学習で高校2年生の時に、自分の住んでる自治会や町内会の会合に出て地域防災計画とかあるいは地域福祉とかを学ばせてもらって、それをやった後に3年で自分たちがやれることを提案して、もしそれが、自治会側が認めてくれたら、それをやるような実践をされています。そしてこれをコーディネートしているのは高校の先生なんですね。

その方がやっぱり職制的にコーディネーターとなることができるし、地域は町内会長自治会長おられるので、地域のことはそこで勉強させてもらう。そのときにポイントとしているのは、こうした高校生の地域での活動が、地域の便利使いみたいにされると困るので、しっかりと教育的な意味というのをですね、

高校側が押さえて実践していくことが大切になります。

先程の高校生が地域に全然いないという風に言っておられたことでも、こうして授業で地域に出て学んでいるということが一般化すると、比較的つながりやすいかなというふうに感じます。

【議長】

はい、今のお話は、先程のコーディネートをされている先生が社会教育士という資格を持っておられると随分視野的な所が違うかなと思ったりもします。

ありがとうございました。では、前半の時間が来ましたので、まだ御発言していただいてない方もいらっしゃるんですけども休憩をとらせていただいて、後半に続きをお願いします。

■休憩■

それでは後半の部分に移ります。

前半はたくさんの方の御意見いただきまして、ありがとうございました。後半もよろしくお願ひいたします。

それでは、事務局のほうから提言案について、御説明よろしくお願いします。

【事務局】

○提言書（案）

- ・資料2 提言案について
- ・資料3 人生100年時代の地域における学びと活躍推進事業について
- ・資料4 令和4年度に向けた取組案について

【議長】

はい、ありがとうございました。

今後の施策に関わるってということで、あと1時間弱しかないんですけどもその中で、それを踏まえて、それぞれ皆さんの御意見ちょうだいしたいなと思います。よろしくお願いします。

【加藤委員】

今の御説明を聞いて14ページのところで、各世代がともに参画する地域コミュニティ・スクールのイメージ図のところで、社会福祉協議会の方では、レイカディア大学という高齢者の活動、ボランティアグループがありますので、そういったところと連携ということも面白いんじゃないかなあということを考えていて、同じように今の地域の課題で、そういったレイカディアの学生さん、あるいは、ここにあるような高校生・若者が何か一緒になって、何か出来ないかと思ひます。出来ると面白いんじゃないかなってというようなことを考えていました。

【平尾委員】

取組案の2つ目、社会教育主事養成というところで、人材の養成・育成という面では、安曇川高校の話

のように「自分たちでどんな学校にしたいのか、未来像を見せる・伝える」という、ありがたい姿・自分たちの未来像に向かっていろんな取組を組立てるとよいと思います。

私も企業の中で、いろんな施策をするときに、「未来対応型」という施策をしています。

例えば3年先5年先をどうありたいかを自分たちで想像します。そしてそれに向けて、今は何をすべきか、短期間ではこんな施策をしていこうと、ボトムアップ方式で自分たちの店や課で考えていく施策のとり方です。

漠然と上司が言うことやられ感が出るので、自分たちがどうなっていきたいかということを考えて、こんな未来が待っているというところから落としこんでいかないと、自分たちが考えてやるという気持ちが湧いてこないと思います。

いろんな研修をするときに、安曇川高校のときもありましたワクワクするような姿を皆で描いてから話をしていくのがいいと思います。

もう一つは、提案の中の魅力の探求というところがありましたが、私たちも、何年も前に会社の中で、琵琶湖検定をとらせてもらいました。自分たちは、滋賀にしながら、全然知らないことがあり、検定を受け地域のことがわかっていきました。

今後、未来を担う中・高生の方々には、いろんなこと知ってもらって滋賀をもっと愛してもらいたいと思うので、この取組に関して共感を抱きました。ぜひともこれを取り組んでやっていけたらなと思います。

#### 【藤谷委員】

今の取組案、聞かせていただいてです。今、大滝小学校という、全校50人の小さな学校ですけれども、今年も修学旅行はコロナ禍なので、本当は広島への修学旅行を昨年も計画し、滋賀のよさを再発見というテーマで、滋賀県内の1泊2日の修学旅行を今年もやります。

去年は苦肉の策ですけれども、非常に好評で、今年もそれをやってほしいという要望が保護者からも子どもたちからも出て、今年も「滋賀のええところ探し」というテーマで、子どもたちが行き先とか、調べたいことを全部比較検討して、手作りの1泊2日の修学旅行を9月の2・3日に行きます。

人材育成ということについて、私の大滝小学校では、とにかく自分たちの地域を愛するとかということじゃなくて、もっといっぱい知ろう。まず知ろう。知っているようで知らないことがいっぱいあるってということで、地域学習を大事に取り組んでいます。

そういう取組をする中で、こちらから押しつけるのではなくて子どものほうから、この地域いいなあという思いが勝手にわいてくるというか、いろんな人とかかわりの中で、そういった自然発生的な愛着や郷土を愛する郷土愛などそんなものが、自然と出てくることを期待してやっています。

そういった活動の中で中・高生という若者をどう取り組んでいくかということですが、今年度、大滝小学校の子どもたちは、多賀中学校に行くのですが、今年度、多賀中学校の卒業生たちが、大滝小学校へもう1回帰ってきて中学校生活の大事にしたいことや入学のときに気づけたほうがいいことを、先輩が後輩たちにメッセージを送る企画を今立てています。

郷土を愛するのと同じように、後輩たちを大事にする。そして自分たちの経験が、後輩たちに役立っていくというようなそんな思いっていうのは、何かこう人材育成というものにつながっていく要素があるのかなっていうことを思っています。

### 【議長】

ありがとうございました。今、三人の話を聞いて私なりに共通していると思ったのは「場の設定」ということを思いました。どういう場や機会を提どもすることで、子どもたちとか企業の社員さんとか、地域の方々が活動するのか。

大事なことは冒頭、安曇川高校の感想でも述べておられた「若い力が引き出されていく」ためには、今までこうだったからといって若者のチャレンジをくじかない。そういう大人になりたくないというのが持続可能というか、SDGsの視点からも大切に思います。

最後に校長先生もおっしゃった若者とどういうふうと一緒に歩み歩んでいくかっていうのはすごく大事なのかなと、皆さんの御意見でいろいろ思もわせていただきました。

また、吉田委員が冒頭で話された異なる背景を持つ人と何かでつながっていくことが大事だってこれもものすごく大切なキーワードだと感じました。ありがとうございます。

### 【田口委員】

さきほどの論点整理を踏まえてすごく要点を押さえた提言にまとめていると思います。これを滋賀でどうやって本当に現場に落とし込んでいくかっていうときに、僕の中で二つの支援が必要かということを感じています。

一つは、今、この場で話し合っていることは、どの地域でも同じように教育サービスを提供していくのに、効果的にコーディネーターを育てたりして、そうした場をつくっていけるかということ、もちろんすごく大事な視点ですけど、実は今、私自身が取り組んでいるのは、選択と集中みたいなところなんです。

それは、やる気のある自治体さんや、やる気のある学生がいるところに呼ばれて、そこで支援をしています。いろいろな事情が市町はありますし、でもそうは言ってられない、もう待ってられない自治体もあるので、早く滋賀のわかりやすいリーディングモデルみたいなものがあると、早く取り組んだ先輩たちがすごく輝いていて、後からあんな活動を俺らもしたいっていう後輩が自然と生まれてくるのではないかということをお伝えしています。

そういう意味で先行して活動しているところに、もっとフォローしていくっていうことも必要なんじゃないかなと思います。別にそれはお金じゃなくても、情報発信みたいなのところもそうですし、そうやって頑張っている中高生や小学生の取組も全体的にPRするようなことをやるのも良いと思います。

そうやって活動してきた子っていうのは、必ず大学になっても戻ってくるのをもう見ているので、今、長浜で僕自身は2年目ですけど、高校生の活動支援をしている中で、実はもう長浜市は、独自で5年ぐらいつつと、市長部局の生涯学習文化課や企画課が、高校生のチャレンジ支援みたいなことをされていて、人口減少でこのままだと長浜市ヤバイっていうところから始まっています。当時、長浜市出身で、彦根東高校の高校生がいて、彼は生徒会に入っていて初めは強制的にこんなのがあるから行ってこいと言われ学校から送り出されたわけです。

しかし、やる気のある子だったので高校1年生のとき、彼は住んでいた長浜市のことはよく知らなくて、それを通じて長浜っておもしろいみたいなの、地域活動にはまり、今、大学2年生で、大阪のほうの大学に行っていますが、僕と一緒にプロジェクトに取り組んでいて毎年夏になると帰ってきて、高校生の活動をもう全力で支援しています。

こういうふうに、5年ぐらいのものですが、生態系がもう十分出来ているので、去年参加した高校2年の子が、おもしろかったと言って3年生でまた参加してくれ、そうやって少しずつOB・OGも育てているので、こういった学生たちのネットワークをいかに早くそれぞれの地域ごとに作るかというのが、重要だなと思います。

最終的には、地域ごとのスクラムを早く組まないと、負けてしまうと思います。負けるっていう表現もあれですけど。長浜だったら、もっと言えば小字単位で、こういう探究学習の支援するようなスクラムが組めると、すごく面白いのではないかなと思うので、面的な支援も大事なのですが、そういう、滋賀県の中でも、この地域面白いぞっていうのをどんどん作って、我々全員であそこいいぞって、高島市の安曇川って面白いみたいな発信をみんなでしいうのも大事なんじゃないかなというふうに思いました。

#### 【金井委員】

今話を聞いて、私もここ2・3年近江八幡市に行かせてもらっているのですが、そこでいろんな農家の方とか、藍の染色やっている方、奥永源寺では政所茶をつくられている方など話を伺うとみんな川と琵琶湖の水質を守ることですごく意識されていて、そういう暮らしの在り方っていうのが、自分のような他府県の者からすると非常によく見えました。

農家の方も、お茶を作っている方も、やはり自分の仕事に誇りを持っているっていうか、そういうところに行った高校生は、背中を見て育つと言いましたけど、結構影響受けて、そのあとも何回も来るっていうふうになったので、まさに今、先程言われたように、縦連携ですね、中学生高校生大学生っていう縦の連携を紡いでいくと、大学なっても来る高校になっても来る、逆に中学生が小学校に行くとかですね。先程の提案の地域でなるべく縦連携と、それから横の社会の広がりとの関係を、縦系と横系を織物のように紡いでいくと、大人たち、子どもたちが出会ってすごく住みがいのある地域になるんじゃないかなと思いました。先程の意見にすごく賛成です。ありがとうございます。

#### 【加藤委員】

今のお話を聞きながら、機関連携ということを考えていました。

地域活動で「通学合宿」という取り組みを思い出してまして、例えば中学校のお兄ちゃんお姉ちゃんが小学校の子どもに勉強教えて、それで、教えられていた子どもは、また自分が中高生になって教える立場になる。そういった活動を作っていたのは、地域の大人とか公民館とかそういったところで、「通学合宿」というのを取り組んでいました。それも一つの世代間の連携の取組だなんていうふうに感じました。

地域の大人は、自分たちが子どものとき地域の大人が通学合宿のような世代間連携をやってくれたというのを思い出して自分も大人になったときに、またその通学合宿にいくということが継続されている。

そういったところで、すごいおじちゃんおばちゃんだったよねっていう思いが、地域の愛情とか愛着みたいなところにつながっているのだと思いますし、世代間連携っていう、ここにおいても、小中高といった連携が取組を通じて出来ていくといいと感じました。

#### 【議長】

ありがとうございます。今話すごくうなずいて聞いておられて、実際やっておられますけどもいかがですか。

### 【吉田委員】

生涯学習情報「におねっと」は中学生とか高校生のときは学校からのプリントとしてもらうことあるのですが、「におねっと」が地域の自治会長に渡ってというルートがあるのですか。

多分野連携の研修もされていてすごく中身が濃いですが、届いていかない部分があり、今回私も竜王町のお話をさせていただいたので、自分で竜王町に宣伝しているみたいなのところもあり、そして役場で教育委員会の生涯学習課はもちろん御存じにはなったのですがそれ以外の課で、発表の前日にチラシを見て出ているからちょっと来ましたという方もおられ、せっかくこれだけの議論もそうなのですが、いいこといいものをいっぱいつくっていろんな分野からの意見が出ているにも関わらず、教育の外のところに出てないってところが残念ではある点でもあります。

しかし、そこが可能性だと思って、もし出たらすごいのではないかと、待っておられる方はたくさんおられて、昨年のお分野連携のときにまちづくりの方とかいろんな方が来られ、講師に多くの依頼があったってというのは、そういうことだと思うのですね。

何か社会教育って部分が地域と重なっているにも関わらずその方たちに届いていないってところが、今回、実感した部分でもあります。大きな可能性だと思うので、それをあわせてどう発信していくのかとか、従来の形ではない何かってというのは何かないのかなっていうのを、すごくひしひしと感じています。

あとは今日のお話の中でなるほどって思ったのは、小学校の字会のお話をされたのですが、私は学校のコミュニティ・スクール委員になっているのですが、字会は問題があったとき、登下校中に問題やもめごとがあるときに字会をします。そのときに学校の先生の立場というのは何とか字委員さん（保護者）でやってください。字のもめごとだから、保護者と生徒で片づけてくださいというスタンスをとられていて、これは、自分事にしていくことやいろんな人とどうやってうまくやっていくかを学ぶ場が字であるっていうのをみんなが理解していく、その辺りで先ほど言われたモデル化・見える化し、自分の身近な字・地域のもめごとが一つの学びのツールとなる。そんなことを紹介して発信していくことで、地域での関わりが教育なのだ。そういうことを先生方とか保護者の方にも届くような形を示すとすごくいいのではないかと思います。

いろんなことが現場で既にあるので、それが知られて行き渡るといえるのか、届いていくことっていうのを、今回のこの提言にも含めて、「どう届けていくか」というところを入れていただけたらありがたいかなって思います。

### 【宮本委員】

私も本当に同じことを思っていて、こういうところで話し合っていたことがもっともっと、市民・県民とかいろんな人に、どうやったら伝わるのだろうかということはいつも悩むというか、どうしたらいいのだろうかと思うのです。

この人生 100 年時代における次世代を担う人づくりっていうのを私見たときに、もちろん中心になるその子どもたちとか、地域の人たちっていうところはすごく大事だなっていうのは思うのですが、さらにこの地域で、それこそ暮らしている保護者とか、そういう人がちょっと薄くなっていうのをすごく

思っていて、意外にお母さんたち、県外から嫁いできた人ってすごく多くって滋賀って結構多いと思うのすけど、そういう人たちってなかなかその地域のことを知ってという機会がとっても少ないと思います。

私も県外から来ているので、子どもたちが教えてもらったことを子どもから教えてもらって知るとか、そういうことってすごくたくさんあるので、幅広いそれこそ子ども会とか、いろんなPTAとかする人にも地域のことをもっと魅力を知ってもらえる機会っていうのがあると、そういう人たちがどんどん地域に、私もこういう地域なら関わりたいなって思ってくれるきっかけになると思うので、そこら辺の世代の人この表でいくと、シニア世代中心の団体っていうことと高校生の若者程度に現役世代の中心の団体っていうこの現役世代というところが意外に、もう少し手厚い何かがあってもいいのではないかなと思いました。

#### 【橋委員】

保護者の関わりの大きさってというのは、本当にその通りだと思います。

子どもは学校にやっておけばいい、それから地域のことは、周りの者がやってくれるからフリーライドで乗りこなしたら何とかかなるというような感覚は少なからずあるかなっていうふうに感じています。

私事ですが、地域学校協働のコーディネーターをしていて、先ほどは学校と地域の話をしていましたが、私はPTAを長くやっているので、PTAをいかに学校に巻き込んでいくとか、地域とつなげていくかということをしていただいています。

学校に関与するのも、子どもを介してだったら親はとも興味を持って介入していきます。ところが、地域のことになると、どう経験を積んでいけばいいとか、成功体験や子どもの良いことにつながる、達成感になったり、充実感だったり、そういうものを多く経験すると、地域の行事とかに比較的ハードルが下がってくると思います。このようなチャンスをどんどん提供してというふうに考えながら、それぞれの事業が回るように心がけてはいます。

しかし、いろいろな人がおられ、いろんな価値観でこられて、PTAも揺さぶられたりなんかするのですけれども、それでも子どものためというお題目はまだ効果的です。それをいかにその親のモチベーションにつなげるかっていうのは、こちらの仕掛け具合だなというふうに思っています。

子どもが大きくなって親になるわけで、今、子育てをしている親が環境を整えなければ、この子達が子育てをするときに絶対困るわけです。その未来像が見えたらもう少し地域のことに本腰がはいるのではないかなと感じています。

自分たちが今、楽しく子育てをすること。そのサイクルが一巡したときに、自分たちは楽しかった。よかった老後が楽しい、蓄えもある、楽しく暮らせていける。あなたたち頑張りなさいよって言ったけれども気づいてみたら、子どもたちが子育てをする頃に子育てがすごく困難な状況になっていて、地域が回らない。そうやって子どもにお父さんお母さん、私らのために一体何をしてきたのと問われて初めて、そこで自分に刺さってくるわけですね。

その未来は、今、発信しておかないと、自分たちの地域のことに本腰が入らないというふうに感じます。

#### 【議長】

ありがとうございました。前期の県社会教育委員会議のテーマが「困難な課題を抱える家庭・子どもを支える支援について」でした。今の話を聞いていても、地域はそんなに希望ばかりあるものではない。現実を見た場合、いろんなそれこそ多様でいろんな方がいらっしゃる。そういった中で、皆さんは、その地域を今、よくしようとする中でどうやってつながろうかと努力をされている。今、僕が感じたことは「モチベーション」という言葉です。

最近、すごいなと思ったことで、仁禮 彩香さんを御存じの方もいらっしゃるかなと思いますが、小学校1年ときに、公立小学校の道徳の授業が一つの答えしかないような授業に疑問を感じ、自分の行っていたインターナショナル幼稚園の先生に相談されたら、小学校部をつくってくださることになり、公立からそこへ転校し卒業され、気づきからどんどんつながりが広がって、高校生で起業し、今度は学校をつくろうとされています。そこに演出家や様々な著名な方も協力されて、実現されました。感性の鋭い若者の発想でどんどん変化を起こされていました。

これは先程、全然背景は違うのだけれども、何か自分たちのどっかでくすぐるものを、どんどん繋げていくようなことになっていく。

そこで先ほど、おっしゃった「どう伝えるか!」ということが大切で、いいメンバーが集まっていい話をされていて、そのことをどのように伝えていくか、企業では社外・社内でどう伝えられていますか。

#### 【平尾委員】

最近、よく思うのが、何かを伝える場合、伝えたらそれで終わりになってしまっていると思うのです。

実は、伝えた後に、それを腹落ちして理解しているかということが重要になります。会議で今日は、これをやりましょうといういろんなことを発信します。メールやチャット、ラインや通達文とかいろいろですが、発信した後、どれだけ腹打ちしているか、チェックや確認をしないと一方的になってしまうと思います。この辺あたりが重要かなと思います。

お客様に関しても広告を打つときは、相手の目線で見たり、お客様の声を聞いたりしないと目線が偏ってしまうと思います。こういった辺りもしっかりと分析やチェックをして相手側の声を拾っていかないと、通達文だけで結局、伝わらないと意味がないことになってしまいます。

最終的にそこをしっかりと確認し、同じ立場や逆の方向で一回見てみたりすることを意識していかないといけないと思いながら仕事に携わっています。

#### 【議長】

ありがとうございます。

企業は、今、お話しがあったように振り返りを次に活かすかということをされています。

私も保育園で乳幼児の小さいお子さんにどういう形で振り返りをするか、どうやって話し合いをするかということを考えています。子どもを主語にして活動するとは、やはりどう立ちどまり、子ども自身の姿を見て、自分たちが押し過ぎだったかなという気づき、何かを仕掛けをつくるなど、相手の目線で考える工夫が必要だと感じています。

#### 【金井委員】

最初にどなたか言われた未来を語るというのは、我々も参加できると思いました。

そして、小学生を滋賀県に修学旅行に連れて行ってよかったという話から、遠くに連れていくよりも多くの発見というか、いわゆる、地元の近くの方がすごいという、そういう驚きが、何か一緒に未来を考えていこうっていうことになると思います。

例えば、そうした社会見学をPTAの女性と子どもと一緒にいったら両方が、滋賀にはこんなお寺がある、そして門前町には、餅屋があって、滋賀には結構おいしい餅屋さんがいっぱいあるという風に気づきがあると思います。他府県から来られた保護者もだんだん滋賀に目を輝かせるようになって輝いていって、そういう中でだんだんこう、エモーショナルという感情的に、いいなあっていう風に、共通感覚を持っていくと、英語でコモンセンサーですかね。これが皆の共通感覚になると、何か一緒に何かやろうという気運が出てくるのではないかなあと思いました。

僕ら教諭はどうしても知識知識でばかりを教えようとするのです。やっぱり共通に体験して、共通の感覚が湧くっていうことがすごく大事じゃないかな。

近江八幡のフィールドワークで八幡山のとっぺんに登った時、立命館大の日本史の先生に、ここから滋賀と琵琶湖どう見えるのかっていう話をしてもらいました。高校生も大学生も信長が見た景色はこんなのだったのかなということを話していました。

また、地元の松明をずっとされている自治会の方がこの松明への思いっていうこと語られて、松明をどうやってつくるのがわかったりして、学校では自分の反省を込めて思うのですが、知識ばかり教えることが多いのですよ。特に高校では、地域のことはほとんど教えないのですね。

だからキーワードとしては、共通感覚でエモーショナルな感情が一緒になっていくと、家庭での話もかみ合うし、学校やあるいはコーディネーターとかの横の会話もできるのじゃないかなって思いました。

特に小中学校の先生やPTAの方がおっしゃっていることを通して思いました。

#### 【議長】

挙手はしていただいております。お話しいただければありがたいんですが、よろしいですか。

はい、では最後によりしくお願いいたします。

#### 【永井委員】

論点整理の4番の(2)のところ、モノ場所について、この二つ目の子どもたちは学校教育を終えて大人になると青年団という受皿があり、それを卒業していくと親にはPTAの方へという部分で、現状、本当に青年団って今受皿になっているのかなっていうふうに思うのです。

それと、人生100年時代の、担う人づくりの図ですよ。子ども会というのは、本当に子どもが何か交流しているのかなって思うのです。これ実は、ほぼお母さん方がすごく交流されているので。そういうことでは子ども会がPTAっていうか、子育て世代のところに入ってくるのではないかと思いました。

そして、さっき言った青年団は本当に今どれだけの若者が青年団に入っているのかなってというのは、ちょっと心配なところですよ。

次に地域女性団体っていうのがありますが、PTAの役員さんってこれもお母さんが多いのです。これらをずっと見ていくと子ども会もお母さんだし、PTAや地域女性団体もお母さんで、これなんか女性のことばかりが図に表れてきていて、男性とか若者、若い男の人とかが何か活躍する受皿はないのかなとか、もっと表に出てこないといけないのかなって思いました。

**【議長】**

はい。長時間にわたって本当にありがとうございました。

この提言、先ほどは、9ページにあったスケジュールのとおり、今後、事務局とのやりとりの中で、また教えていただき修正できればと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

今日はこちらから御指名する形が多く、失礼なところもあったと思いますけれども本当にいろんな方から御意見を承ることが出来てよかったなと思っています。御協力ありがとうございました。

それでは事務局の方にお返ししたいと思います。

**3 閉会**

**【閉会の挨拶】**